



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

「三人の聖者 ガンディー③」

一九七一年初渡印のとき、わが輩の大恩人Kさんから七通の紹介状をもらった。その内の一枚がガンディー・アシュラムへのものであった。ガンディーの三男ラーム・ダースの妻ニルマラー宛である。

Kさんはヒンディー語を習い、その後アシュラムで農業指導をしていた。僧侶ではないが僧よりも僧侶的で、純粋でスピリチャリティに溢れた人である。その半生をインドのために尽した影の人である。

紹介状をもらったとき、わが輩はアシュラムについて訊ねた。Kさんから「形骸化している」と聞いていたが、まだ往時の雰囲気を残していた。

ガンディーの高弟ヴィノバ・バーヴェ (1895-1982) も生存していた。わが輩はアポイントを取ることもなく突然訪ねていった。今から考えると恐れを知らない無恥なる行為である。何の知識もなく、したがって質問することもできなかった。しかし聖者というものは常に寛容である。快く面会してくれた。それなのに、写真を撮りたいので外に出て下さい、などをお願いをしてしまった。何と厚顔無恥な要求であろうか。

ところが、ヴィノバは何の躊躇いもなく願いを聞き届けて下さった。

(なんてわが輩はバカ若者なのだろうか!)

中国では「朋あり遠方より来る、また楽しからずや」というように、仲のよい友達がやって来て歓談することを楽しみとする。

最近聞いた話だが、インドでは予定した客よりも突然の来訪者を喜ぶという。それでわが輩は少し安心した。馬鹿さ加減度が少し下がったように思ったからである。

二〇一四年一月に数十年ぶりにアシュラムを訪れた。

昔ワルダーの駅からアシュラムまでタンガー (乗合馬車) に乗った記憶がある。一面に畑が広がっていた。今や家々で埋め尽くされている。

アシュラムは、インド独立時に果たした政治的な役割は見受けられないが、農村復興活動は盛んなように見受けられた。自然との共生がテーマである。

なるほどと思ったことを一つ紹介しておく。

底のないコップ大の素焼きの壺を窯で焼く。それらを重ね合わせると長い空洞の筒になる。

天井に何列も並べて固定すると、天然のクーラー・システムになる。粘土はどこにでもある。小さな窯で焼くことも難しくは無い。エアコンを購入できない農家には有益である。

自然を活用しなるべく自然の中に生きる。アシュラムの存在意義は、そのことが可能であるという証明の一つである。

ガンディーの思想・非暴力主義は形骸化してしまったのだろうか。いいや、そんなことはない。

インドを越えて、紛争が続く「世界」が必要としている。

中国の覇権主義の危機が迫っている。だから軍備が必要でガンディーの非暴力主義（アヒンサー）では対応できない、という右派の喧伝が広まろうとも、たとえ無力で非現実的でも、常に声高に叫ばなければならない。

非暴力主義とはそういうものなのである。

人は物を必要とするが、それ以上に心の充足を必要としている。それには相手を殺さないことである。傷つくのは相手ではなく、自分の心だからである。

少し話題をかえるが、今年（二〇一五年）六月二十一日は第一回「国際ヨーガの日」であった。功労賞が四団体に授与された。この記念日を制定したのはモディ首相であるが、ある人物が首相に耳打ちして決まったという裏話がある。

その人物とは、ヴィカース・スワループ元大阪総領事である。映画「スラムドッグ・ミリオネア」の原作者（小説「ぼくと1ルピーの神様」）である。

つまり「国際ヨーガの日」は、大阪が発祥なのである。

ここからはわが輩の推測である。スワループさんに影響を与えたのは、日本ヴェーダータ協会と日本ヨーガ療法学会の活動である。その盛況ぶりに感心していた。わが輩こそ、その証人である。

今度スワループさんに会ったら、耳打ちしたい。

「国際アヒンサー（非暴力）の日」を制定して下さいと。今度はインドが発祥の地となる。